

リハビリテーションの現場で求められるもの

◇運営委員 宮森 拓真（JA長野厚生連佐久総合病院佐久医療センター理学療法科）
早川 琢（北海道勤医協労働組合）

いま、皆さんの職場では何が求められていると感じていますか。

高齢化の進行により、リハビリテーションの役割はこれまで以上に大きくなっています。一方で、人手不足は深刻さを増し、業務量は増加傾向にあります。単位取得に加え、記録や計画書等の書類作成、退院支援、多職種連携、職能研修、臨床実習指導、地域活動、災害時の支援など、求められる役割は広がり続けています。

診療報酬改定のたびに評価の仕組みは見直され、「効率」や「成果」がより強く求められるようになっていきます。しかし、その評価は現場の実感とどこまで一致しているのでしょうか。間接業務やチーム医療への貢献、生活再建を支える継続的な関わりなど、数値では測りにくい専門性は十分に評価されているのでしょうか。

また、物価上昇が続くなかで賃上げの議論も進んでいますが、私たちリハビリ専門職の処遇は十分に改善されていると言えるのでしょうか。人手不足の背景には、業務負担と賃金水準のバランスという課題もあるのではないのでしょうか。このままで、安心して長く働き続けられる職種と言えるのか、不安を感じている方も少なくないのかもしれない。

忙しさの中で、「もう少し丁寧に関わりたい」と感じたことはないのでしょうか。

単位取得や効率を追うことだけが、現場で本当に求められていることなのでしょうか。

人員配置、診療報酬上の評価、処遇改善、専門性の可視化など、制度の動きと現場の実態をつなげて考えることが、いま私たちに求められているのではないのでしょうか。

本分科会では、職場での日々の実践や悩み、工夫していることなど、率直な声を持ち寄っていただきたいと思います。皆さんの現場の声が、これからのリハビリテーションを考える大切な力になります。症例報告や職場で感じていることなど、形式は問いません。ぜひ積極的にレポートをお寄せください。